

# 日本人は日本の素晴らしさに鈍感

ジョン・キム[John Kim] twitter: @kim\_passy

2013年7月19日  
集英社新書  
不安が力になる  
日本社会の希望  
ジョン・キム

作家。1973年韓国生まれ。奥さんは日本人。日本に国費留学。米インディアナ大学博士課程単位取得退学。中央大学博士号取得(総合政策博士)。2004年より、慶應義塾大学デジタルメディア・コンテンツ統合研究機構助教授、2009年より現職。ドイツ連邦防衛大学博士研究員、英オックスフォード大学客員上席研究員、米ハーバード大学インターネット社会研究所客員研究員、慶應義塾大学大学院 政策・メディア研究科特任准教授等を歴任。アジア、アメリカ、ヨーロッパ等、3大陸5カ国を渡り歩いた経験から生まれた独自の哲学と生き方論が支持を集める。

日本は衰退しつつある国家だ。多くの日本人がそのような感覚をいっているように見える。しかし、日本は決して衰退などしていない。1991年のバブル崩壊後、世に言われる「失われた20年」の間に、過去の成長至上主義で走り続けることがけして人生を豊かなものにするとは限らない・・・と分かってきた。日本人の「心のありよう」が進化してきているのだ、特に若者は……

従来の物質的な欲求(金・物を第一に考えるライフスタイル)から日常生活の中で得られる内面的充足を大事にする方向に向っている。心で自分なりの幸せを感じている。

勿論、金・物を否定しているのではない。金・物が全てではないというのだ。若者にとって生まれてこの方20年ほど、好景気だった経験をしていない。

現在、日本の若者の物質的な豊かさはある程度のレベルに達している。かつての大人が物質的な豊かさを幸せの概念と直結させていたのとは大分違う。

日本は成長をある程度、犠牲にしても生活の質を高めようと思う余裕の在る珍しい国になったのだ。欧米を中心とした資本主義的なライフスタイルから離れて他の次元にシフトしつつあるのが日本の現状で、日本はこれからの人類の進む世界の先をいっているのだ、決して日本は沈んでいるのではない。

日本では貪欲にがたがた働かなくても、それなりに幸せに生きていけるような社会が既に構築されている。

人々は精神的に成熟している。その努力の対象は地位や名誉、給与などではなく、自分の中で満たされればそれで十分と考えている人々が過去に比べるとはるかに多くなってきている。

今の日本は、世界の中でもかなり幸せな国だと私は思う。どこの国でもいいが、海外に長期間滞在していた人とは、この気持が共有できるに違いない。海外に滞在すると日本の素晴らしさを痛感する。世界中どこに行っても、こんなに安全で、便利で、清潔なところはない。

その素晴らしさは、日本人の持つ高い倫理観に基づいている。それは、東日本大震災避難行動でも示された。あんなに危機的な状況にも係らず、誰もがパニックを起こさずに、秩序を守って一列に並ぶ。食料を分け合う。そして窃盗や暴動が殆どおきない。この様子は海外メディアでも、感嘆の声とともに報道された。

また、日本を構成する重要な要素として「平和」であることが挙げられる。国民はみんな平和が持つ大切さを心に刻みつけている。

日本人は、自分たちの弱点や課題については明確に認識し、メディアなどでも声高に指摘する。しかし、自分たちが持っている本質的な素晴らしさは、十分に認識していない。日本では当たり前とされていることは、海外に行くと美德となるのだ。

そして、今の日本は歴史上でもトップレベルで豊かな状態だ。日本と同じ位の経済水準で、社会的な問題が日本より少なく、かつ経済成長をしている国が他にあってだろうか。あるとすれば、北欧など日本とは人口的に比較にならない規模の国だけである。



2013年7月17日に集英社から『不安が力になる — 日本社会の希望』という本を出します。私にとっては初めての新書であり、初めての日本社会論です。日本人の知らない日本の素晴らしさについて約20年に渡る観察から論じました。

日本人が知らない日本の素晴らしさとは何か?

90年代のバブル崩壊直後に日本に留学し、米英独の大学で研究員となり、慶應義塾大学特任准教授として教鞭をとった著者が、約20年にわたる観察と体験から、日本社会の本物の強みを論じ、新しい生き方の指針を示す。

第一章／日本は沈んでいない

第二章／自分の人生は自らデザインする

第三章／世代を超えて調和する

第四章／美しく生きる

あとがき～不安を力に変える人生